
白猫に素敵な相棒を

ぬこ巻き寿司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白猫に素敵な相棒を

【Nコード】

N9499Z

【作者名】

ぬこ巻き寿司

【あらすじ】

ふぁんたじーが書けない人間が頑張ってみました！

基本的になす様になる感じのお話です。

お話の構成は登場人物が決めるので僕にはアイデアは降って来ることはありません。

異世界、動物と会話可能、色々頑張る、そんな感じのゆるいふぁんたじーモノです。お暇がある人に捧げます。もちろん多忙でも大歓迎

迎。

僕はこうしてトリップしてしまいました

あれ、僕、落ちてる？

若干の浮遊感。少し眠い。意識がはつきりしていない。

少し経ち、僕が「落ちているのだ」と気づく頃には僕の体は完全に重力に任せて空気を切り裂くように落ちていた。

僕が落ちている（現在系で）穴は何かアニメで見るようなワープゾーンや不思議の国に落ちる時のメルヘンな穴ではない。

なにか現実味に満ちた、普通の穴。言うならば、おにぎりを追いかけて落ちたようなメルヘンの欠片も無い殺風景で普通の土の色をした穴。

だが、落ちた認識してから数十秒は経っているこの穴だが、まだ落ち行く先、出口が見えないような途方もないモノを普通の穴だと言いたい張れるような度胸を僕は生憎持っていない。

僕が宇宙空間から地球に向かって伸びている落とし穴に落ちたのか、地球から地球の内部、つまり核に向かって伸びている落とし穴に落ちてもいいない限りこんな長さがあつてはならない。はずだ。

しかし僕は宇宙なんて生まれてこの方行つたことが無い（将来の夢も未定な僕）し、核までたどり着ける最高のボーリング技術を開発した、というニュースも寡聞にして聞いたことがない。

と、僕は落ち始めて数分は経つたであろうこの普通に異常な穴で自体を分析する。パニックになつていいのか自分に言い聞かせているのか内容が説明的な文章じみていることは後から思い返してみても気づくのであつた。

ともあれ。

そもそも、こんなことになっているのは僕がこの穴に落ちたからであるが、しかし僕は時計兎やおにぎりを追つて間抜けにも穴に

自分から穴に喜び勇んで向かって行つたわけではない。
僕はそのことをパニツクになっている頭で回想する。

―事の発端は、白猫。白猫が突然僕の前に現れたことからだ。

白猫はこの世に場違いなような神秘的な目をもって僕に問いかけた。
「あー、あー、お、今日は声が出る日だ。では君。俺の影を知っているかい？」

いきなり前触れなく遠慮なく白猫が僕に問いかけた。
しかし、僕は動物と会話ができる、という実際世の中ではあまり役に立たない能力など持ち合わせていないが故に、「え？」と白猫に一言返すしか無かった。

白猫はその妖しい目で僕だけを見て語る。

「いや、ほら。俺の影。というか、猫が喋っている光景を目の当たりにしているのだよ？もうちょっとびっくりしても良いじゃないか？」

「え、あ、すいません」

訳も無くとりあえず謝る。僕の悪い癖だ。

僕と白猫がいるこの路地裏、路地裏といっても通るのはゴミと虫だけ、なんて事はなく―いや実際僕が通っているのだが、人通りも意外に多く、僕が混乱をもって白猫と相対している今現在も行きかう人々がちらほらと存在している。

それなのに皆この軽い口調で喋っている白猫のことを気にするものはまるでいない。どうやら僕にしか聞こえないようだった。

まさか本気で能力開花か、と混乱の極みにいて「能力開花、ばんざーい」でこの出来事を終えようとしている、このまま思考を止めようとしている脳に鞭を打ち、もう一度白猫との会話を試みる。

「ええ、それで白猫さん」

「なんだね」

白猫はどうやらキャラづくりを始めたようで、さっきの何も考えていないような、悪く言えば阿呆な声をやめた。そして打って変わって他者を圧倒するような、自分の存在さえ認めて貰えないような厳格な声で僕に対応する。

僕はそのキャラの変り身の速さによる戸惑いとまさか今の声が白猫の本性、素なのではないかという一種の畏怖を感じつつ白猫に言った。

「あなたは一体誰なんですか？」

ふむ、いい質問だ、とばかりに白猫はうんうんと頷く。首輪の鈴が揺れて街の喧騒とは正反対な綺麗な音がする。

「猫だ」

「知っています」

ふむ。と白猫は猫なりに少し考えるような素振りをみせる。さっきは鈴の音の綺麗さに気を取られていたが白猫の体、体毛はまるで水に濡れたように艶々として野良猫には有り得ないような威厳に満ちているように見えた。

「その説明では不満か？」

「あ、はい、ごめんなさい」

自分の膝下にも満たないような生物に威圧され僕は思わず謝る。

「では話そう」

どうやら話してくれるようだった。

しゃべる猫でも「気分屋」という猫ならではの性質は変わらないようだ。

「シュレーディングアの猫をご存知かね？」

「しゅれーでいんがー？」

突然そんなものを一介の何の変哲もない男子高校生に聞かれても。

しかし白猫はどうやら僕が答えるとは最初から期待していなかったようで、「そうだ、量子力学上のパラドックスのことだね」と白猫自ら先に解答を呈示してくれた。

その解答の意味も分からない僕。

「量子力学？パラドックス？」

「ああ、そこからか。全く、近頃の若者は――」

白猫はその艶やかな足で顔を掻きつつ本気で困ったような口調で僕に諭すように言った。

「…量子っていうのは、簡単に言うと、…まあなんとというかとりあえずどつかの天才が発明したやつだよ」

自分も知らなかったらしく、以前のおどけた声に戻って曖昧に説明する白猫。

「パラドックスって言うのは？」

「それも知らないのか。そのくらいは知つとかないと駄目だぞ」

今度はおどけた声とは逆方向の声音、出来の悪い子を優しく説き聞かせる親のような物言いで僕に向き合い言った。

「パラドックス。それはすなわち“矛盾”の事だ。矛盾の意味からいはずっているよな？最強の矛に最強の盾を突き立てればどうなるのか、という話が語源になった相容れない事柄を指す言葉なのだが」

「ああ、それくらいは知っています。確か国語で習いました」

「それなら今の説明は要らなかったかな。まあ良い。本題はシュレ―ディンガーの猫だ。難しい話だから噛み砕いて話そう。寝るのじやないぞ？」

白猫は僕にそう告げる。そもそも猫と会話していること、猫が人語を理解し僕を諭すような口調で話していること自体奇跡だ。しかもそれに加え、僕より多く物事を知っているという事実若干だが打ちひしがれそうな僕であったが、猫と会話ができるといふ今まで生きていた中でおそらく最大級であるうイベントで眠くなる、などとは絶対に無いと断言できるので「もちろん」と自信をもって答える

ことができた。

じゃあ、と白猫は厳格な声に戻り、首を振って綺麗な鈴の音を響かせながら説明を始めた。

「シュレーディングアの猫と言うのは、例えば一時間後に青酸ガスが発生するかもしれない装置がある。ここでは殺傷力のある道具、という意味で良いだろう。別に一時間後にナイフが飛んでくるかもしれない装置、などでも構わないけどね。そこらの怖い想像は君に任せよう。話が少し逸れてしまったね。それでその部屋に猫を入れたとする。猫が居る部屋を密閉して一時間放置しておく。そうするとどうなる？」

「……？」

残念なことに、白猫が説明していることが全く理解できない僕。

白猫が先生で僕が生徒、（それも先生の言うことを理解できない出来の悪い）という関係、に難解な問題のおかげで忘れかけていた無力感に再び打ちひしがれる。

じゃあヒントをあげよう。と白猫は微笑むように語りかける。

「一時間後に青酸ガス、もしくはナイフが発射されて猫が死ぬ確率は50%だとする。一時間後にその部屋の猫はどうなっている？」

「…その猫は50%の確率で死んでいる？」

「うん、半分は正解だよ。そしてもう半分の答えは、『そしてその猫は50%の確率で生きている』だ」

「50%の確率で生きているということは50%の確率で死んでいるということと同じ意味だから結局同じことを二回言っている事になりませんか？」

なんだ、そんな程度か、と非難するような視線を向ける白猫。僕は思わず、気圧され白猫から数歩さがる。猫に気圧されるとは何とも間抜けな話だがこの猫はどうやらただの猫ではないらしいので仕方が無いとする。

「今、君が言ったのは、『死んでいる猫がいるのと生きている猫が

いるのは同じ意味ですよ』だ。まったく違うじゃないか。よく考えてみなさい、生きている猫や死んでいる猫を観測、発見するのは観測者だ。よって観測者は生きている猫か死んでいる猫のどちらかしか観測できないわけだ。死と生というのは対偶であり矛盾そのものだからね」

「ああ、そういうことですか」

つまり、『生きているか死んでいるか。その二つのうちどちらかしかわからない』といった感じの解釈で良いのだろう。僕はここで理解をしないと話が進みそうも無かったので半分しか理解していない頭を縦に振る。

「それで、その、シュレッダーの猫がー」「シュレーディングーの猫だ」

改行のする余地もなく訂正される。横文字はどうも覚えにくい。

「その、しゅれーでいんがーの猫っていうのと白猫さんの影とはどう関係があるのですか？」

「うむ、発音が平仮名チックだったことは不問にしておくとして、それは大きく関係する。まあ今は君が知らなくても良いことかな」

「ああ、はい、そうですね」

今まで語っていたのは貴方じゃないか。

そんな言葉を口にする余裕は僕の中の無力感や混乱に引っ掻き回されて残っていなかった。

「じゃあ、僕はこの辺で」

「またれい」

突然、そもそも猫が喋っているという混乱と早くこの場から居なくならなければならないという本能が告げている焦燥に駆られ僕はその場を後にしようとする。しかしそんな僕を白猫が見逃してくれるはずもなく、白猫に昨日買ったお氣に入のズボンを引っかかれて僕は足を止められる。

「ああ！僕のズボンが！僕が唯一『そのズボンは良いよ』って言われた品なのに！」

「…それは失礼した」

割と本気で反省しているような白猫。そして割と本気で引つかったのだろっ、無残に縦に裂かれた僕のズボン。僕は若干の怒りを覚えながら白猫に言った。

「それで、白猫さん。あなた結局僕を捕まえて何が言いたかったんですか」

「怒るなよ…しかも目的は最初に言ったよ…」
なぜか逆切れ状態の白猫。

「あ、僕の口調で気分を害されたのならすいません」
なぜか謝る僕。やはり悪い癖だ。

「いや、良いんだよ。俺が大人気なかった」

「いえいえ、こちらこそ」

そういえば白猫の年齢はどの位なのだろう。この物腰、迫力、眼力などを鑑みると物凄い時間、数百年や数千年と言っても不思議は無いが。しかし相手に無視されると怒る、こちらが怒ると逆切れを始める、と言った性格も含まれていることから案外普通に三から四歳なのかもしれない。この口調は老獪を気取ってみたただけ、とか。

僕は一番初めの白猫の台詞を思い出しつつ話を戻す。

「あの、あなたの影を知っているって―」

白猫は僕の話を遮る。

「問題ない。俺の影など微塵も知らないのだろう？」

「ええ、全く」

「じゃあ仕方ないな、」

と白猫は一旦言葉を区切り、少し考えるような仕草をする。

しかしもう白猫の中では決定事項なのか、さほど時間を掛けずに再

び僕と向き合い、その傲慢な眼は僕を見据えて残酷に告げた。

「今から君には少しこの世界から消えてもらう。ちょっと違う世界に行ってもらいたい」

「違う世界？」

僕の間抜けな言葉の反芻を無視し突如襲ってくる浮遊感。

じゃあ、頑張ってね。

威厳や威圧などとは程遠いおどけた声、そんな声が聞こえた気がした。

ああ、やっぱりそっちが素だったんだ。

これが僕の、ひとまずはこの世界における最後の言葉となるのであった。

僕はこうしてトリップしてしまいました（後書き）

始めまして、ぬこ巻き寿司と申します（、・ω・、）

この後書きを読んでいるということはきっともう本文を読み終わったことなのでしょう。

なんというか、読んでいただきありがとうございます！！
つても誰もこの後書きを読んでいる可能性もあるという現実
は悲しいものです。

うわ、涙出てきた。

いや、日本の誰かは読んでくださったはず！！
というわけで、ありがとうございます！！！！

あ、アドバイス、批評大歓迎です！！てかお願いします！
なんかあったらお願いしますd（。D（（。D（b

僕はこうして駄菓子屋に行きました

広大な大地。その地平線は何処までも続き、ここから世界のあらゆる物が見えてもおかしくなさそうな草原。

其処には色とりどりの花に草木が今この瞬間を最高に生きるように命を情熱的に燃やし、それでいて爽やかで晴れやかな世界を晴れやかな世界を演出する上で欠かせない存在となるであろう空も抜けるような青空で真上には太陽が全ての生物に等しく生命の輝きを与えている。

さながら理想郷、幻想郷のような世界。

ただ僕はそんな幻想郷に違和感を添える添加物のような存在があるのを発見した。

地平線の少し彼方、この距離ではあまり分らないが、何か建物、というか廃墟、といったほうが適切なのかもしれないような感じの建物が建っていることだった。

「・・・かなり古いけど、誰か人でも住んでいるのかな？」

と自分で言ってからここで動物や人間を一回も見えていないことに気付き、あの建物の近くに言ってみようという気持ちが芽生える。

恐る恐る、慎重にその建物に進む。今さっきこの訳の分からない場所に連れて来させられた手前、凶悪なモンスターにガブリ、はい物語終了なんてこともない事は無いだろう。冷や汗をかきつつさらに前に進む。

さっきまで生命の輝きを与えていた太陽が自分を焦がす敵のように感じてくる。その暑さに反比例するように鳥肌が立つ皮膚。何かの危険信号かも。

「大分近くなっただな・・・モンスターは居ないよな・・・」

建物は大分老朽化が進んでいて今にも壊れてしまいそうなトタンの屋根にガラスの引き戸、そして黒ずんだ木で出来ていた。しかしその建物の風貌はなにか小奇麗なものを感じさせた。築年数は古いのにまるで誰かしらの手入れを受けているような。ガラスはぴかぴかで割れているところなど無いし、外装の木だって傷こそあるものの致命的を傷は補強している跡が見える。

ようやく建物の中が見えるまでに近づく。モンスターは居ないようだった。代わりに何かお菓子、それも昭和（生きていないから勿論想像だが）のようなお菓子や玩具が置いてあるようだ。僕はもう少しそれに近づく。

「駄菓子屋・・・？」

人の気配は無い。このままこの駄菓子屋に入っていつてしまおうという気持ちと入ったら大変なことが起こるのではないかという気持ちとが混ざり合って心の中でマールブル色を作り出す。

「まずはノックだ」

僕は折衷案として取りあえず少しガタがきている扉を少し強めにノックした。

「すいませーん、誰か居ないんですかー？」

・・・返事が無い。

ただの屍のようだ。

「ってそうじゃなくて」

誰も居ない場合はどうすればいいのだろう。僕は考え込む。

「このまま入った時のメリットを考えよう。・・・無い。けど、前に進まない。入らなかつたときのメリットは危険から避けられる。しかし白猫に飛ばされてしまったこの世界から脱出を図る糸口かもしれないな・・・」

白猫の言葉を思い出す。影を知らないか、と言っていた。

影を見つければ帰れるのだろうか。そもそも影、というのは何かの比喩だろうか。

影とは、太陽が出ているとき限定な自分の分身のようなもので、ずつついて回る面倒くさくて寂しがり屋な奴です。そういう答えを望んでいないことなら僕にだって分かる。それならばやはり比喩なのだろう。

「まあ、しゅれーでいんがーとか言ってた猫だからな……。ひよつとすると僕の脳髓では理解不能なことなのかも知れないな」
よし、と心を決める。

「たのもー」

僕は勢い良く扉を開け放つ。少し力を入れすぎたのか扉が軋む音が聞こえる。

勢い良く開け放ったのは良いがやはり駄菓子屋、もとい廃墟の中は駄菓子類しか存在しておらず返事は無い。

ただの屍のようだ。

「ってそうじゃないんだよ。一回使ったネタだろ」

誰も居ない事に少なからず気落ちしたがそれより凶悪なモンスターがお出迎えに来てくれなかったという安心感の方が強かった僕は少し気が緩んだのか独り言を口にする。

「……でも、僕はこれからどうすればいいんだろう……」

僕は一息つこうと古くなり壊れそうな椅子に慎重に座る。壊れなかったことで一安心。もう一回「たのもー」と言う余裕すら出来る。その瞬間。駄菓子屋の奥、なにか畳が敷いてある和室のような部屋から声が聞こえた。何を言ったのかは定かではないが、僕に対して言っているのは明白であった。慌てて椅子から立ち臨戦態勢になる。

まあモンスターが出てきたら戦えないけど。

また声が聞こえた。今度ははっきりした声で僕に何かを言う。しかし何を言っているのか聞き取れない。

「それ」はいきなり僕の視界に入ってきた。困惑する僕。慌てて

その場を退く。

「うわっ！」

しかし「それ」は僕を一直線に見て今すぐにでも襲い掛からんとする。黒い塊が再度僕の目に映る。もう一度身を翻して逃げようとするが「それ」は僕の肩に乗り首を掴んで僕に言った。

「ああ、ごめんよ。翻訳機能がおかしくなっていたのかいな。そりゃ訳分からん言葉言ってくる猫がいたら逃げるわな。ごめんなさいね。君に危害を与えるつもりは無いのだよ」

しゃがれた声。どこか懐かしさを感じさせるような声。おばあちゃんの声、みたいな。

僕があっけに取られている間に「それ」は僕の肩を下り、今まで僕が座っていた椅子へと場所を移す。

綺麗な体毛、白猫とは違う本物の老獠ろうかいのような雰囲気。威厳に満ちた顔つき。

すべてが正反対なのになぜかあの白猫を連想させる。

僕はしゃべる黒猫に出会った。

黒猫は言う。

「あらあら、今日はお客さんが多いこと。じゃあ、こちらに来なさい」

黒猫はそこで言葉を切り、さっき声が聞こえた和室を指差しながら再び言葉を発した。

「とりあえず、今君が疑問に思っていることの大半を教えてあげるから」

僕はこうして駄菓子屋に行きました（後書き）

がんばってみました。

感想とか評価とかやってくれたら小躍りしますm9つ、・ω・、（

僕はこうして黒猫と会話が出来ました（前書き）

ここまで書いて登場人物の名前がないことに気が付いてしまった。
名前は付けません。覚えられなくなるし。

僕はこうして黒猫と会話が出来ました

「まず何から話せばいいのかな」

和室。ちょこんと可愛らしく正座する黒猫は僕を見て言う。猫が正座って何なんだ。僕はとりあえず「いえ、語りやすいところから」と答える。

その返答に納得がいかなかったのか黒猫は人を殺せそうな視線で僕を見る。

「おや、人任せかい。それじゃあ感心しないね。もっと自分が聞きたいことがあるだろうに」

――全てが分かんないから全てを聞きたいんだよ。

という突っ込みを入れたらどうなるか分かったものではないので胸の奥で飲み込んで僕は黒猫の問いにもう一度答える。

「では、まずなぜ僕がこの世界に来たのかについて」

「そんなの知らないよ」

「・・・・・・」

一蹴された。

「そんなのも分かんないでこの世界に来たのかい？」

泣きつ面に蜂。なるほど、不条理ってこういう事なんだ。

僕は何故か痛くなる胸を押さえつつ黒猫に弁解する。

「いや、僕は、その、なんか僕たちが住んでいた世界で変な白猫に会ってですね」

とそこで黒猫は僕の話を遮るように独り言を始めた。

「やはりアイツの仕業か……。どうもおかしいと思ったら……」

「あ、あの？黒猫さん？」

またも自分の膝にも満たない小さな生き物に敬語を使う僕。なんか情けなくなってきた。

黒猫は「お、そうだったね、ごめんよ」と僕に謝る仕草をして話

の再開を促す。「ほれ、言ってみなさい。その、変な白猫って言うのは？」

「何となく、見た目からしておかしかったです。何処が、というか全体的に。何か雰囲気というか、物腰というか。そして何より言葉を喋っていました。『今日は声が出る日だ』とか言って」

黒猫は少し唸りながらだろうか？声を低くして僕に問う。

「それで、奴は何かを無くしている、もしくは何かを探していると言っていたかい？」

「はい。影を探していると言っていました」

少し考えているのか眉間にしわを寄せる黒猫。

猫の眉間って猫の額より狭いんだよな。なんでこんなに猫って表情豊かなんだろう。下手な人間より表情が分かり易い。

「む。なんだ、なんか文句があるのかい？」

「ああ、いや、すみません」

顔を凝視していたら黒猫の気に触ったようだ。慌てて謝る。そして何度目か分からない無力感。猫に物腰低くして謝るなんて昨日まで夢にも思わなかったのに。

まあ許してあげるよ、と言わんばかりに黒猫はため息を吐く。猫なのに。

「――まあ、その話はまた後で。役割になってから改めて」

「役割？」

「いや、もうじき分かる。ちょっと待ってておくれ」

そういつと黒猫は今僕たちがいる和室の襖を開けてその闇の中に消えていった。しまった。

僕はこうして状況を整理できませんでした（前書き）

今までのまとめみたいなモノです。僕が後々こんがらからないように書きました。

まあ読んでも読まなくても支障はありませんがw

僕はこうして状況を整理できませんでした

「…状況を整理してみよう」

黒猫が襖の奥に消え、一人になった時間を使い、これまでの惨状（といつて差し支えないはずだ）を纏めてみることにした。

僕はある日、お出かけをしていた途中、路地裏で変な白猫と出会いました。その猫はいきなり僕に話しかけ、「影を知らないか」と言う質問の趣旨が分からないことを聞かれました。

僕は当然いきなり出てきた猫の影なんて知っているはずはありません。だから僕は正直に知りませんと言いました。

「…今更ながらよく猫と会話が出来て錯乱しなかったな…。混乱はしたけど」

回想を続けよう。

そうしたらその白猫は「しゅれーでいんがー」とか「量子力学」とか「ぱらどつくす」とか取り敢えずこんな言葉を使えばインテリ間違いなしな言葉を普遍的な高校生である僕に使ってきました。それも三ついつぺんに。

「猫に理解できて僕に理解できないって…」

…少しみじめになったが回想を続けよう。

それで、色々あつて白猫に飛ばされました。この、おそらく異世界に。

それでこの広大な世界の片隅にもう壊れそうな駄菓子屋を見つけ、ガタが来て壊れそうな扉を開けたら黒猫に教われました。

「…猫嫌いになりそう」

と、言うわけで今に至る。結局何がどうなっているんだろう。

頭の中で疑問符が飛び交っている中、黒猫が襖の置くから姿を現した。

「はい、君の前のお客さん。この子も白猫に飛ばされたようだから、仲良くしてあげるんだよ」

そう言う黒猫の視線の先には、犬と僕と同じくらいの年の女の子が佇んでいた。

お話はこうして動き始めました

「はい、君の前のお客さん。この子も白猫に飛ばされたようだから、仲良くしてあげるんだよ」

黒猫の指差す先には一人の少女と犬。少女、と言っても僕とさほど変わらない高校生くらいだろう。綺麗なはずの黒髪をボサボサにしている。そして綺麗なはずの顔立ちもボサボサの髪に隠れて見えなくなってしまうている。そしてなにより僕の目を引くのは彼女が長袖でいるにもかかわらず犬のリードを握っているその手には無数の傷跡が見て取れることだ。

そのつながれている犬はというと、彼女の飼い犬なのだろうか、彼女にとってもなついている様に見える。茶色い毛並みがふわふわとした尻尾が破裂した水道管のように縦横無尽に振られている。

「ほら、貴女も彼と仲良くしなきゃだめでしょう？モカちゃんと仲良く出来るのに」

黒猫はため息をしながら言う。それとどうやら犬の名前からして性別はメスのようだった。

と、そのとき僕の目の前に現れてからずっと黙っていた彼女は僕と初めて目を合わせつぶやくような声で言った。

「モカはオス。ちゃんとついてた」

「え、ああ、ごめんなさい。飼い主なの？」

彼女の視線が突き刺さるように痛い。僕は逃げるように質問を投げかける。

「違う。今日会った。こいつも白猫に会ったんだって」

「も、って言うことは君も？」僕は同志がいた事に少しながら安堵する。

「うん。あの野郎に喋りかけられた。もう私猫嫌い」

そしてまた鋭いまなざしを向ける彼女。しかしどうやらその眼差しは僕に向けられていたものではなかったようだ。僕の後ろにいた黒猫はやれやれ、と言った感じで彼女に言う。

「何度言ったら分かるんだい。アレは喋るんだよ。喋る猫なんてどこにいないんだい。だいたい、人間や犬を異世界に飛ばせるような能力は猫は持っていないだろう?」

彼女も負けじと反論する。「喋る猫ならここにいるでしょうが!ここ!私の目の前に!しかもこっちの猫はその異世界で駄菓子屋を経営してる!っていうかこんなところに客なんて来るの!?」

「ああ、確かに。お客さん来るんですか?」これは僕の発言。一人と一匹の争いを止めるための発言であつたが、確かにこんな意味不明に広大で意味不明に駄菓子屋で何故か黒猫が人語を話す場所なんて来る人間がいるのだろうか。

いや、猫が喋っているのなら見に行きたくもなるが。

黒猫は彼女の所から僕の方に体の向きを変えて答えた。

「いいや、実際君たちが初めてだよ。だから私はこうやって喜んでいるのさ」

「なるほど。じゃあお客一号じゃないですか」

「喜んでいるようには見えないけど」

感心する僕。

どうでも良い、と言わんばかりにそっぽを向く彼女。

何も知らず尻尾を振っているモ力。

三者三様の反応だったが、黒猫はそれで満足したのか、「じゃあ閑話休題だ。取り敢えずこれからやらなければならぬことがある」と僕たちに、まるで何か重大な宣言のように言った。

黒猫は僕たちの顔を見回し、もったいぶる様に舌を舐め、僕たちに言う。

「じゃあ、今から役割分担だ。この世界での役割を君たちに渡そう。まあ、そのくらいは許してくれるよね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9499z/>

白猫に素敵な相棒を

2012年1月13日00時59分発行